

令和2年度 岡山県立岡山大安寺中等教育学校 学校評価書 (別紙)				最終評価				
学校経営重点目標	具体的方策	担当部署	評価指標・評価基準	自己評価(中間)		自己評価(最終)		関係者評価
				達成状況	評価	達成状況	評価	
1 新型コロナウイルス感染症に対し、安全・安心な教育環境を整備すると共に、学校行事の見直しやICTを活用した教育活動等に取り組む。	・昼食時の手洗いを励行させるため新たな手洗い場所を設定して、全学年に徹底指導する。 ・昼食の模範摂取形態を示し、全校で徹底する。 ・食堂の利用計画を立て、3密を避けながら利用させる。 ・清掃時、担当者の除菌を励行する。	厚生課	・感染者の多少ではなく、ゼロかそれ以上で評価される可能性があるので数値化による評価基準は難しい。 A 生徒自身に意識の向上が見られ自発的行動が取られるようになる。 B 教員の指導が欠かせない状態である。 C 慣れや情性によるモラルの低下が顕著である。	・現段階では、生徒自身の予防意識の高さと校内での予防体制が、効果的に機能しており体調不良者が出ていない。 ・今後、県下での感染者が増加してくる中で電車での登下校に不安を抱える生徒のケアにどう対処するべきか懸念される。	A	・現時点(2月26日)での感染状況がゼロである。発熱や体調不良者によるPCR検査は出ていないが陽性者が出ていない。 ・食堂での密回避も、机の配置や指示パネル、巡回等の工夫が添えられることで安全安心度が増していった。	A	B
	G-suiteを活用し、全ての教員がclassroomを作成し、毎朝の健康観察や、休業期間中の動画配信を行う。さらに、通常授業でのG-suiteの活用方法について研究する。	GIGAスクール委員会	G-suite活用に関するアンケートにおいて、 A classroomを作成し、動画配信を行った割合が90%以上 B 60%以上A未満 C Bに満たない	・休業期間中に動画配信を行った割合は84%、G-suiteの設定がスムーズにできた割合が86%であった。 ・毎朝の健康観察については、臨時休業後も継続し、回収方法の改善を行った。	B	・Chromebook活用のための教員研修を前期課程の教員を中心に2度実施することができた。 ・授業での活用も3年生を中心に広がりつつあり、後期課程でも前期課程のChromebookを活用して課題探究等を進めるなどしている。	B	B
2 高い目標を掲げてチャレンジする生徒を育成、支援する。	(1) 身の回りの様々な課題に気づくことができるよう地域社会での活動を促し、課題解決に向けた学習に取り組ませる。(特に前期課程)	総合研究開発室	総学のルーブリック評価において A A又はB評価の生徒が80%以上 B A又はB評価の生徒が60%以上80%未満 C Bに満たない	・例年通りに実施できない活動もあるが、活動内容を外部へ発信する新たな取組を実施している学年もあり、モチベーションが上がっている生徒もいる。1、2年生が実施した短期間の活動の評価は、それぞれAに該当する。	A	・例年通りに実施できない活動もあるが、各学年で身に付けさせるべき力を確認しながら、6年間の系統性を意識して取り組むことができた。 ・統計グラフコンクールへ出品した作品の中には最優秀賞をはじめ入選したものも多くあり、生徒は活動を通して探究のための意識を高めることができた。 ・ルーブリック評価については、A又はB評価の生徒がほぼ100%であった。	A	A
	(2) 大学等と連携した研修等に参加させ、高い進路意識や志望を持たせるとともに、自己実現のための努力を促す。	進路指導課	志望校調査・アンケートなどの結果やその推移をもとにして、重点目標の達成状況を総合的に評価する。 A 進路アンケート「主体的な学習ができていますか」80%以上、学校評価アンケート4・10、90%以上。 B Aに満たず、昨年度の結果と等しい。 C Bに満たない。	・進路講演会は6月に6年生が実施。他学年は9月の下旬以降に実施。オープンキャンパスについては、今年度は多くの大学がwebでの実施であったが、進路情報の提供や面談等を通して進路意識の高揚を図っている。 ・生徒の志望状況についても、現状では高い目標設定(東大・京大・医学科など最難関大の志望者の総数は、6年35名、5年46名程度)ができています。	B	・進路アンケートの「主体的な学習ができていますか」という質問項目に対する肯定的な回答は、「1年:86%、2年:84%、3年:80%、4年:71%5年:78%、6年:81%」という結果であり、多くの生徒が自己実現に向けて前向きに努力できた。 ・学校評価アンケートの質問項目4、10については、それぞれ90%、85%となっており、昨年度(89%、83%)と比較すると僅かではあるが増加している。 ・生徒の志望状況についても、難関大や国公立大の医学科などレベルの高い大学を目指している生徒が多く、それぞれが高い進路目標を持つことができた。(東大・京大・医学科など最難関大の志望者の総数は、6年31名、5年48名、4年43名)	B	B
	(3) 各種コンクール、セミナーへの参加を促し、他校生徒と積極的に交流させる。	グローバル教育推進室	参加生徒に対してアンケートを実施し、その結果を基に総合的に評価する。 A アンケートの肯定的回答が80%以上 B アンケートの肯定的回答が60%以上 C Bに満たない。	・従来のグローバルコーナーに加え、1～6年の廊下付近に学年ごとのグローバルコーナーを新設した。それらのコーナーで英字新聞の記事、本校教員の海外での体験を書いたエッセイ、国旗クイズ、英語漫画の翻訳コンテスト、SDGs関連掲示物、英語の豆知識などを紹介している。 ・クイズ等には複数学年から、複数生徒が参加している。 ・英語ディベート大会に向けて4・5年生の12名が練習を重ねている。	B	・グローバルコーナーの参加型企画では、延べ100人以上の生徒がクイズに応募したり、翻訳コンテストにチャレンジしたりした。 ・参加生徒においては、8割以上が肯定的な回答をした。 ・継続的にグローバルコーナーにおいて情報発信をすることができた。 ・英語ディベート大会においては県大会優勝とベストディベーター賞の受賞、続く全国大会においてはベストディベーター賞入賞を果たした。	A	A
	(4) 英検準1級レベルの、国際的に通用する高い英語力を身に付けさせる。	英語科	英語の授業でディスカッションやディベートに関する活動を6年生以外の各学年で行う。新型コロナウイルス感染予防の観点から、マスクの着用、換気等の対策をしたうえで、その活動の時間を確保する。 A 各学年とも3時間を超えた。 B 各学年とも2時間から3時間程度であった。 C Bに満たない。	・新型コロナ感染予防の観点から、マスクの着用、換気等の対策をしたうえで、日々授業を行っており、それぞれの学年で、レベルにあった活動を行った。 ・1年生では自己紹介から他己紹介、2年生では自分の意見を述べるような取組、3年生では簡単なディスカッションに向けての段階的な活動、後期生になると、授業の帯活動としてミニディベート的な活動を取り入れたり、単元のまとめとして1時間時間を割りたりすることができた。今後も継続的に実施する予定である。	B	・コロナ対策としてペアやグループによる活動に制限がある中、各学年の到達度に合わせたやり方で、「話す」活動(ディスカッション、ディベート又はそれに繋がる活動)をそれぞれ3時間以上行うことができた。 ・その他3技能の活動についても、教科書、図表、新聞記事、検定過去問、HPやSNS上でのやり取り、入試問題など様々な題材を用いて多彩な活動ができた。 ・今後もこうした取組を継続したい。	A	A
3 大学入試改革の状況を見据えつつ、新学習指導要領(前期課程:令和3年度から全面実施、後期課程:令和4年度から年次進行で実施)に対応する、6年一貫教育の特徴を生かした教育課程を編成する。	後期課程の教育課程については、7月末までに各教科、各学年からの意見をまとめ、10月末までに新教育課程の案を作成し、12月末までに新教育課程を仕上げる。 ・評価方法については、1学期に各教科で検討したものを全体で集約し、8月末までに1年生(11期生)でシミュレーションし、10月中旬までに前期課程の評価方法について決定する。	教務課	教育課程研究委員会を計画通りに開催し、後期課程の新教育課程作成と前期課程の評価方法をまとめる。 A 12月末に教育課程・評価方法ともに仕上がっている。 B 12月末までに教育課程は仕上がっており、評価方法は不十分である。 C Bに満たない。	・前期課程の評価方法についても、予定より遅れているが、2学期末にはシミュレーションまで行い、3学期に仕上げて来年度からの実施に備えたい。 ・後期課程の教育課程については、予定より遅れているが、9月末に教科主任に改訂の論点を説明し、10月末までに各教科からの案を集約、11月末までに新教育課程の案を作成し、12月末までに新教育課程を仕上げるようにしたい。	C	・新教育課程の編成については、6年一貫の系統性を意識して5年生までのものを作成した(今年度中に6年生まで含めて完成させる予定であったが、大学入試の動向についての情報が少なく、完成には至らなかった。)。今後の大学入試の動向を注視しつつ、次年度の7月を目途に弾力性をもちた形で6年生の部分を完成させたい。 ・学習評価については、今年度は前期課程について、年間指導計画の様式を統一し、総合的な学習の時間との関連を意識し、教科の枠を越えて、学校全体として一貫した教育が展開できるようにした。次年度は前期課程の内容や手法を生かして、後期課程の内容を完成させるとともに、必要な内規の改訂にも着手する。 ・教育課程作成や評価方法についての研究は必ずしなければならないことであるので、次年度は内容項目についても検討し、適切な目標を設定したい。	B	B
	新型コロナウイルスの影響で、現時点では英検の開催も不透明であり、本校の準会場としての実施は1学期は中止となったが、本会場受験が実施される場合には、2次試験の面接指導など、各学年で各段階ごとの指導を加えていく。	英語科	英検(2級以上)の面接指導を各学年の英語科教員で分担して行う。 A 指導を希望してきた生徒に対して全員3回以上指導を加えることができた。 B 全員2回以上指導することができた。 C Bに満たない。	・英検第1回が6月に1次試験、7月に2次試験ということで、申し込みが臨時休業中だったこともあり、コロナ感染予防の観点から、本校では本会場受験を実施しないことにした。生徒も本会場での受験を控えたうえで、面接指導は、ほとんど行っていない。 ・第2回は準会場として実施するので、目標をクリアできるように取り組みたい。	C	・英検第2回については、コロナ対策の留意点を踏まえながら、一次対策・二次対策の指導を行うことができた。しかし、二次対策の面接指導については、想定した以上の生徒の希望があったため、3回以上の指導を行うことはできなかった。 ・英語への学習意欲を高めるためにも、英検対策の指導の取組を継続的に実施したい。	B	B
						・英検準1級取得 2名		

学校経営重点目標	具体的方策	担当部署	評価指標・評価基準	自己評価(中間)		自己評価(最終)		関係者評価	
				達成状況	評価	達成状況	評価		
4 総合的な学習(探究)の時間と各教科での学習を関連させ、探究的な学習を深める取組を進める。	(1) 過去2年間の研究を踏まえ、「総合的な学習(探究)の時間」等のカリキュラムを開発する。	総合研究開発室	A 昨年度の計画をもとに、各学年で6年間の縦のつながりを意識した取組を行っている。また、来年度へ向けて修正案ができていく。 B 昨年度の計画をもとに、各学年で6年間の縦のつながりを意識した取組を行っている。 C 昨年度計画した内容が実施できていない。	・コロナウイルスによる影響により計画通りの実施はできていないため、順調に修正案ができていくとはいえない。しかし、計画が変更しても各学年で身に付けさせたい重要なスキルは押さえられるよう一覧表を作成している。 ・各学年で行っている活動を周知するため、定期的に通信を発行し、紹介している。	B	・コロナウイルスの影響により昨年度の計画とは異なるが、各学年で身に付けさせたい重要なスキルは押さえられるよう一覧表を作成し、これを意識した活動を実施した。その中で昨年度の計画に新たに追加したい活動を含め、来年度の年間計画の作成を進めている。 ・各学年で行っている活動を周知するため、定期的に通信を発行し、紹介した。	B		
	(2) 「深い学び」につながる授業改善に取り組むとともに、課題研究等を通して探究的な学習者を育てる。	授業力向上委員会	生徒による授業評価アンケートの「学びが深まったか」の項目で評価する。 A 平均90%以上 B 平均85%以上 C BIに満たない	・教科会を開き、各教科で考える「深い学び」について協議、まとめを行った。全体協議はできなかったが、資料は全教員に配り、情報共有することができた。 ・コロナウイルスによる休校で実施できなかった授業互見については、10月中旬から11月中旬にかけて実施し、それに向けた授業改善を進めている。	B	・10月26日～11月27日の約1か月間、授業互見を実施し、1～5年までの全教員が授業公開を行った。その実践を指導事例集として冊子にまとめ、年度末には県内中・高等学校へ配付する予定である。 ・授業評価アンケートの実施が遅れ、現在集計中である。	B		
		グローバル教育推進室	生徒達成度 A 平均80%以上 B 平均60%以上 C BIに満たない。	・新型コロナウイルス感染予防のために、4年生は海外研修を国内語学研修に変更し、3年生の海外研修は来年度に延期した。 ・2年生の留学生との交流は実施時期を2月に延期している。 ・5年生ではグローバル講演会を11月に、また希望者対象のグローバル講座を3回実施予定である。 ・時期、形態は異なるが生徒が英語と触れる機会を設け、生徒の語学力と学習意欲の喚起を図る。	A	・グローバル講座とグローバル講演会では、参加生徒の肯定的回答が83.5%であった。 ・記述回答においては学びの深まりや、学習意欲の向上について書かれたものが多く、自己目標に対して意欲的に取り組んだ様子が見られた。	A		
			昨年度 4年生:85.2% 3年生:80.5%						
	(3) 自身の取組を客観的に見つめる、「俯瞰する力」を育成する。	生徒課	外部からの苦情電話件数の、1か月平均の数によって評価する。 A 1件未満 B 1件～1.5件未満 C 1.5件以上	・6件の苦情電話があり、その都度SHR等で注意喚起を行っている。 ・交通委員会を中心にマナーアップのポスター掲示も行っており、今後も細かな指導を継続していく。	B	・13件の苦情電話があり、交通8件、電車マナー3件、その他2件であった。 ・交通委員会ポスター、SHRでの注意など継続的に指導しているが、苦情が減ることはなかった。 ・学期末には学年集会の機会もあるので、直接話をしていく。	B		
			昨年度は年間13件の苦情電話があった。						
		保健委員としての日常活動(保健便りの作成や各種検査など)や白鷺祭での準備、体育の部での救護活動などにおいて、異学年で協力して互いをサポートしながら各活動、行事をやり遂げ、かつ十分満足いく結果を出す集団を育成するため、保健委員会や日々の活動の中で声かけや指導を行う。	厚生課	保健委員に対して、半期ごとにアンケートを実施し、その結果を基に総合的に評価する。 保健委員の達成度 A 95%以上 B 90%以上 C BIに満たない。	・今年度は、前期・後期保健委員が一丸となってコロナ予防へ向けて活動した。特に今年度の文化祭は、前期・後期の委員長・副委員長が相談し、同一テーマで展示を行った。異学年で分担して一つの展示物を作成したことで、異学年交流が進んで意義は大きかった。 ・体育祭については、例年通り異学年で協力しながらコロナ予防を踏まえた救護活動・熱中症予防活動を実施して大過なく終わった。来以降の簡素化や衛生上の取組の良い例となった。	A	・昨年度に引き続き、保健委員に、次の3点についてアンケートを実施した。 ①普段の活動における達成度 ②白鷺祭文化の部での異学年での活動達成度 ③白鷺祭体育の部での異学年での活動達成度 達成度は次のとおりになった。 ①93% ②41% ③68% 平均 67% ・前期、後期保健委員とも、新型コロナウイルス感染症予防という共通の目標を持って取り組んだ。特に白鷺祭文化の部、体育の部については、互いに協力・サポートしながら取り組むことができたが、保健委員自身にとっては、異学年交流の意識は低かった。	C	
	(4) コミュニケーションを深め、互いの違いを認め合う、一人一人の個性を活かした集団づくりを行う。	教育相談室	A アンケートとQU検査等を分析した上で、両方の結果を活用した面談・支援ができた。 B 結果分析を元にどちらかの機会に結果を活用した面談・支援ができた。 C 活用できなかった。	・前期・後期ともに、どちらかの機会に面談や支援ができていく。 ・今後の調査後にも、分析会等を実施し、生徒の支援に当たりたい。	A	・1学期と2学期には、前期・後期ともに、相談の事前アンケートを行い、生徒の記述を元に面談を行うことができた。 ・QU検査やASSESS検査(2回目)については、分析の仕方が学年によって統一できておらず、クラス全体の支援まで細かく分析している学年と、要支援者の支援方針を中心に分析しているのみ学年と差がでていくことが課題である。教育相談室内での研修を重ねたい。	B		
		教育相談室	A hyper-QUの結果について、学校生活満足度が70%、ASSESSの結果について対人的適応と学習適応が共に高いエリアにいる生徒が70%を超える。 B 同項目において、いずれかが60%を超える。 C 同項目において、いずれも60%を下回る。	・前期・後期とも60%台を推移している。新型コロナウイルスによる臨時休業や、グループでの学習活動の制限などにより、集団づくりが難しい状況ではあるが、引き続き工夫をしながら取り組んでいきたい。	B	・第2回目の結果は、前期が66%、後期は71%となった。今年度は後期課程において達成できた点では改善ができていく。前期課程の生活満足度を上げていくための方策として、アンケートの細かな分析と対策、PBISの実践などを検討したい。	B		
		生徒課	行事後にアンケートを実施し、それをもとに総合的に評価する。 A 「よくできている」「だいたいできている」が全校の90%以上 B 上記が85%以上90%未満 C BIに満たない。(評価は、全行事の平均で行う。)	・白鷺祭のみアンケートを実施できたが、例年同様に積極的に参加し、仲間と協力できているようであった。 ・新型コロナウイルス感染対策・熱中症対策によって思うように活動できていない。	A	・「よくできている」「だいたいできている」についての全体平均は、96%であった。 ・新型コロナウイルス感染防止対策のため十分な活動ができず、満足度が低いのではないかと予想したが、どの行事に関しても積極的に参加し、協力することができた。	A		
		昨年度と違い、制約のある中での行事となる。							

5 業務の進め方を組織的に、また、一人一人が見直し、1か月当たりの時間外業務時間を80時間以内とする。	ミライムの入力を徹底し、各自の業務時間を意識する。	管理職 主幹教諭	A 月80時間以上の人数が平均5名以内となる。 B 月80時間以上の人数が10名以内となる。 C BIに満たない。	・月80時間以上の人数は、4月 2人、5月 1人、6月 13人、7月 9人、8月 5人となっており、これまでの平均は6人となる。しかし、4・5月は臨時休業期間中であり、6月からの平均は9人となる。 ・定時退校日や20時退校日など設定され、管理職による声かけも盛んに行われており、効果は表れている。	B	・月80時間以上の人数は、9月9人、10月22人、11月7人、12月4人であり、4月から12月の平均は9人であった。4月、5月が臨時休業であったことを考えると、まだまだ目標の達成は難しい。 ・定時退校日などの声かけを行っている学年もあり、全体としての意識は広がっている。	B	
	刺繍退校時刻を20時とし、20時以降業務する場合は管理職に目安の時間などを報告する。 月1回の定時退校日を設定する。							
	時間外業務:昨年度48.7時間/月、80時間以上の人数: 4月23名、5月20名、6月22名、7月16名、9月15名、10月19名、11月13名、1月14名、2月14名、3月1名、月平均15.7名							